

ヘルダー触覚論における言語の役割

橋爪 恵子

序

ヨハン・ゴットフリート・ヘルダー (Johan Gottfried Herder 1744-1803) は、現在ポーランド領に属している東プロイセンの小都市モールンゲンに生まれた思想家である。彼はハーマンとともにシュトゥルム・ウント・ドランク運動の理論的指導者として文学、言語学に大きな影響を与え、美学の領域では、論文「彫塑」において彫刻を触覚と関連付けて論じたことで有名である。しかし彼の触覚に関する理論と言語に関する理論は、管見の限りではこれまで十分に関連付けて論じられたとはいえない。

それはこの二つの議論が、別々の場面でなされていることもさる事ながら、ヘルダーが触覚を彫刻という芸術ジャンルに結びつけたのに対し、言語を主に聴覚と結び付けたからでもある。そのため言語と触覚の問題は、一見すると別の文脈にあるかのように思われる。しかし触覚と言語の関係はヘルダーにおいて無視できるものではない。それは第一に言語が、触覚が他の感官と結ぶ関係を表すひとつの典型であるからであり、第二に触覚が言語と結びつくことによって触覚がもつ一つの限界を超える可能性が示唆されているからである。

したがってヘルダーの触覚論を言語に関する議論と結びつけることで、ヘルダーの触覚論、言語論への理解を深めることが本稿の目的である。

第一章 ヘルダーの触覚概念

ヘルダーの触覚論として最初に念頭に上がるのは、「彫塑」であろう。一七八八年に完成したこの論は、彼自身が付した表紙の注釈によれば一七六八年から七〇年にかけて書かれている。そしてこの議論は以下に見るように、ジャンル論という性質を持っていた。

引用1

芸術はきちんと二つの主要感覚、視覚と聴覚に分類される。最初の主役たる視覚には人々の望む一切の平面、形、色、姿、彫像、舞台、跳躍、衣服が付与される。しかし、視覚はそれを要求していない。しかし美しい形をなすものが、本来視覚から規定されるものかどうか、美しい形という概念が視覚をその根源であり、上級判事であると認めるかどうかは、疑問視されるばかりでなく、真っ向から否定される。(中略) 低く体をかがめて彫像の周りをうろつく愛好家を見たまえ。彼は、視覚を触覚と化するために、つまりあたかも暗がりのなかで手探りするかのように見るために、そうする他に仕方がないのではないだろうか？ (FHA 4, 235)

美しい形、すなわち立体で作られた彫刻は色や平面と異なって視覚を「上級判事」としない。彫刻は触覚がその主要な感官となるためのものであるから、色や形に関わる絵画とは別に論じるべきだ。中略以降の部分には後に触れるが、ここではと

りあえず彫刻と触覚、絵画と視覚という連関が指摘されていることだけを確認しておきたい。

芸術の諸ジャンルにおける同一性と差異を論じたジャンル論は、当時のドイツでしばしば論じられた主題であり、有名なものは一七六六年のレッシング『ラオコーン』である。レッシングは彫刻作品のラオコーン像と失われたソフォクレスの文学作品を比較し、絵画・彫刻と文学の違いについて述べた。絵画や彫刻作品において激しい苦悶の表情が見られないのは表現が不十分なのではなく、ジャンルの特質からきた帰結であるとレッシングは主張する。なぜなら絵画・彫刻は空間に色と形を描くことで併存する対象の一瞬を描写するのに対して、文学作品は継起する部分からなる行為を描くジャンルだからである。また同時期にドイツの思想家メンデルスゾーンはレッシングと同様に絵画と文学の違いを論じ、絵画を空間、文学を時間と関係づけ、それを視覚と聴覚という感官の違いと結びつけた。

レッシング、メンデルスゾーンらが寄稿する雑誌『最近のドイツ文学に関する文学書簡』の熱心な読者であったヘルダーは、当然両者の議論を読んでいたはずである。「彫塑」はメンデルスゾーンおよびレッシングの議論に対して、発想の点で賛同しつつも、彫刻の位置づけに異議を唱える論となっている。すなわち、芸術諸ジャンルにおける差異を認め、それによって生み出される表現の違いを肯定しつつも、視覚芸術として一つに区分された絵画と彫刻の違いを指摘する。「美しい形」すなわち彫塑は、平面、色からなる絵画と異なり視覚を根源とするわけではない。平面上に描かれる絵画は視覚によって捉えられるが、立体的な彫刻作品は触覚で捉えられなければならないことを主張するのである。

それではヘルダーの論において彫刻と結び付けられる触覚はどのようなものなのだろうか。一七六九年に書かれた未完の草稿「触覚という感覚について（"Zum Sinn des Gefühls"）」には以下のような文章を見て取ることができる。

引用 2

触れる人間の世界は直接の現在である。彼は目を持たず、従って距離それ自体も、表面も、色彩も、想像する力も、想

像する力の感覚さえも持っていない。全てが現在し、神経のなかに有り、自分の中で直に接している。哲学者にとって
はなんとという世界だろうか。小さいが強固だ (FHA4, 235)

目で距離をとって見る視覚に対して、触覚は直接触れる世界である。視覚が表面、色彩をもつのに対し、触覚はそれを持つ
ことができない。ここで注目したいことは二点ある。一つは触覚が「想像する力をもたない」とされる点である。これを可
能にするのは表面や色彩を持つ視覚に委ねられる。すなわち視覚は以下のような能力を持つものとされる。

引用 3

視覚はもっとも精巧な、もっとも哲学的な感覚である。視覚は極めて精密な訓練、推理、比較によって磨かれ、調整さ
れる [...] (FHA4, 253)

視覚は推理、比較を可能にする。それは物事をはっきりと切り分け、関係づけることで、論理的に捕らえる。これに対して
触覚は全てものを曖昧に受け取る暗い感覚とされる。物事を分離する視覚と全てを一体化して受け取る触覚、視覚と触覚
は第一にこの対比で論じられる。

触覚の第二の特徴は、引用 2 に見られるようにその世界の「小ささ」である。我々が手で触れられる範囲は目で見える範
囲よりもずっと小さい。例えばヘルダーは「魂は自らに触れながら世界の中に入る。魂はその諸力において空間と時間によっ
て制限されているので、全てを直接に認識できるわけではない」(SWS 8, 104) という。人が手で触れられるものは、人の
存在する空間と時間によって制限されている。それに対して視覚はより広い範囲を認識することができる。触覚と視覚は接
触の有無とその結果の距離の大小の対比として論じられている。

このように見ると、触覚は視覚には及ばないようにみえるかもしれない。しかしヘルダーが触覚を「小さいが強固」と述べていることからわかるように、触覚だけがもつ優位性も存在する。実際、ヘルダーは「ある芸術が我々を実態と現実に取り止めておくことができる」とすれば、彫刻芸術こそ「そうなのだ」(SWS, 4, 320)と指摘する。なぜそのようなことが言えるのか。引用1の後半およびそれに続く部分を見てみよう。

引用4

低く身をかがめて彫像の周りをうろつく愛好家を見てみたまえ。彼は視覚を触覚と化するために、つまりあたかも暗がりの中で手探りをするかのように見るためにそのようにするほかはないのではないだろうか？(中略)だからこそ彼は滑り動く。彼の目は手となり、光線は指となった。あるいはむしろ彼の心は、手と光線よりはるかに敏感な指、像を作った人の腕と魂となって、像を己の中につかもうとする指を持っている (EHA, 4, 254)

愛好家は見ていても、触るように見る。そのとき彼の目は手となり、光線は指となる。この引用で注目すべきはその先である。愛好家は手と光線より敏感な指になることによって、像を己の内に掴む。直接接触できることが触覚の特徴であることは指摘されていたが、ただ掴み触れるだけでなく像を己の内に取り込み、かつ像の内部に触れていく。表面上の接触ではなく、内部において見るものと見られるものが相互に関係する可能性が示唆されているのである。

ヘルダーの議論において重要なのは、見るものと見られるものが内側に入り込み同化するだけでなく、そこに反発も生じることである。ヘルダーは触覚を持つ二つの要素、対象を取り込み、同化する要素を引力、反発する要素を斥力と表現し、引力と斥力という哲学の最高概念は、触覚という最も単純な事柄であると指摘する。すなわち引力は対象を内に取り込むが、斥力が生む反発はそれが自己と異なることを示し、逆に自己とは何かを明らかにしてくれる働きを持つものとされる。この

ように魂が触覚を通じて世界の中に入ることは、ヘルダーにとって自己を形成する重要な行為であった。

以上、見てきたようにヘルダーは「彫塑」において、彫刻、および触覚を絵画および視覚と対比させることで、非常に明快な論を展開しているように思われる。しかしヘルダーの論は、絵画と彫刻、視覚と触覚といった単純な二分法にとどまらない。

その点を考えるため、引用1の中略以降の部分を再度見てみよう。ここでは彫刻作品を見る愛好家を取り上げられる。彼はたとえ、目で見ていたとしても視覚を使用しているわけではない。あたかも手探りで作品に触るように見るのであり、触覚的に作品を見ていると指摘される。この議論はヘルダーの論を実際の彫刻鑑賞と適合させる重要な論点と言えるだろう。我々は彫刻を実際に手で触ることはほとんどない。そのため彫刻作品が常に触覚的に鑑賞されると主張するためには、たとえ見ているだけであっても実際は、触るように見ていることが必要となる。

しかしこの議論は他方で問題をはらむものといえる。もし視覚が触覚的に見ることが出来るとするならば、絵画を視覚と、彫刻を触覚と関連付けることで双方のジャンルの独自性を保証することに疑念が生じる可能性がある。彫刻を目で見ていたとしてもそれを触覚的に見る、という議論が成立するならば、絵画を視覚的に見たとしてもそれを触覚的に見る可能性はないのだろうか。絵画は平面であり、彫刻は立体的であると言われたとしてもなぜ立体のみが触れるように見ることが可能になるのか。

この疑問は、ヘルダーが自らの命題を主張した理由を説明するときにより強いものとなる。彼は「あきらかな命題」すなわち「視覚には平面、絵が属し、立体と立体の形は触覚に属する」という命題をなぜ述べたのかを次のように説明するからである。

引用5

それは多くのことに役立つと私には思われる。なぜなら、二つの異なった、そしてたがいにもつれあう感覚の作用の根本法則と、それぞれの個別的領域とは、けっして空理空論ではありえないからだ。学問と芸術におけるわれわれの概念がことごとく、その根源に還元されたならば、あるいは、還元されうるものならば、さまざまな結合はバラバラに分離され、バラバラなものは様々に結合されるであろう。(中略)だからわたしはここで、あくまでも二つの感覚に、そして同じ美という一つの概念にとどまるのだ(FHA4, 252)

視覚と触覚は二つの異なった感覚であり、それぞれに個別の領域を持つが、しかし同時にそれは互いにもつれ合い、還元され得る。分離し、かつ結合するこの二つの領域の関係をヘルダーは、「二つの感覚、そして同じ美という一つの概念」と表現する。すなわち視覚と触覚はまったく別個の感覚ではなく、分離し得ない二つの感覚である。

それでは視覚と触覚はどのように結合するのだろうか。それは、視覚の根底に触覚が存在することで成り立つ。

引用6

視覚という感覚は平面の作用をする。表面の上で像や色で戯れ、滑りまわる。しかも視覚は非常に多くの、互いに組み合わされたものを相手にするから、視覚によって根底に達することはおそらく決してないだろう。視覚は他の感覚から借用し、他の感覚を土台とする。つまり他の感覚による補助概念が視覚の基礎とならなければならぬ。この基礎を視覚はただ光で包んでいるだけである。もし私が今、こういう他の感覚の補助概念に至らないのならば、そしてもし私が姿と形を見て取る代わりにまずつかもうとしないならば、視覚からの美と真という私の理論は永遠に宙に浮いてしま

い、私はシャボン玉を手に浮かんでいることになる(FHA4, 252-3)

視覚は平面の上で戯れるが、それが根底に達するためには他の感覚を土台としなければならない。その補助となる感覚は、引用文中に「私が姿と形を見て取る代わりに、まずつかもうとしなければならぬ」と述べられていることからわかるように、「つかむもの」すなわち触覚である。したがって視覚と触覚は、五感の中のそれぞれとして併置されるだけでなく、触覚がより根源的な感覚として視覚を支えるという役割を果たしている。だからこそ視覚と触覚は二つの異なった感覚でありながら切り離し得ない結合を保つことができ、一つの美という概念に属すると言われる。

第二章 言語と五感

以上がヘルダーの彫刻に関する議論における、視覚と触覚の関係である。ではヘルダーのこの議論の中で言語はどこに位置づけられるだろうか。冒頭で述べたようにヘルダーが念頭に置いているだろうメンデルスゾーンの論では、言語は聴覚に代表される時間芸術に属する。すなわち視覚と触覚、絵画と彫刻というヘルダーの議論の外側に位置する。そして実際、ヘルダーは自らの言語論において、言語を主に聴覚を結びつけて論じている。しかし聴覚についてほとんど論じられない「彫塑」においては、言語に関する別の言及を読み取ることができる。ここでは間接的ではあるが、触覚、視覚の双方と関連付けた形で言語が論じられている。それぞれどのような形で言語が論じられているのか、なぜこのような事態が可能になるのかを次に確認しよう。

まず初めに、言語と聴覚の関係について確認しておきたい。ヘルダーの『言語起源論』では、言語は第一に聴覚に基づく能力とされている。ヘルダーは言語、および文学に関する論考を多く残しているが、その中でももっとも有名なものはこの『言語起源論』だろう。この著作はヘルダーが一九六九年にベルリン学士院が募集した懸賞論文が元になっている。論文「彫塑」の草案は一九六八年から七〇年にかけて作られたため、ほぼ同時期の記述である。この懸賞論文の論題は「人間は先天

的能力のみで独力で言語を發明し得たか」であった。言語は神が完成したものを与えたのか、それとも人間が作り出したものなのか、というこの論争に関するヘルダーの主張は後に見るが、まずは彼が『言語起源論』のなかで言語の発生を聴覚と結びつけて論じていることを確認しよう。

引用7

たとえばここに羊がいたとする。自然という一枚の大きな風景画の上では、羊は像としてあらゆる対象、あらゆる形象、あらゆる色彩とともに目に映るのである。いかに多くのものが視覚にとじ込み、しかもいかに区別しがたいことであろう。あらゆるしるしは細かくいりまじり、並び合っている。したがってどのようなしるしも、言葉では表現できないのである。だれも形を言葉で語ることはできないし、色を音で表現することはできない。

そこで羊を手で触って見る。触覚は視覚よりも確かで具体的なものであるが、他方で、余りにも多種多様で区別し難く入り混じっている。誰が自分の手に感じたことを言葉で語ることができるであろうか。しかし、羊は「メー」となくではないか。これであれほどにも区別することが困難であった色彩画のキャンパスから、自然に一つのしるしが流れてきて深くはっきりと魂の奥まで入り込んでしまうのである。(中略)したがって人間は聞き取る能力としるしを捕らえる能力を持つ生物として、言語を發明するように生まれつついている (FHA I, 734-5)

言語は多様な現実の中で一つのものを分離する能力であり、同じものが再び現れた時にそれだと分かるための印だ、とヘルダーは言う。そして引用では羊という言葉ができる過程について説明している。その際、視覚や聴覚といった感官の区別と世界の認識の仕方が関連付けられている。もし我々が視覚で世界を認識すれば余りにも多くの印が混じっていて区別できなくなる。したがって視覚は言語を作り出すのに適さない。逆に触覚で世界を認識すると全てが入り混じり、区別し難くなる。

これも同様に言語には適さない。ここでは物事を分離比較する視覚の能力と、全てを渾然一体に甘受する触覚の能力という「彫塑」と同様の論点がありつつも、その両者が言語とはなじまないことが指摘される。これに対して聴覚は、適度な分離が可能なため、羊を世界から区別し、同じものが現れた時の再認識を可能にする。そのとき人は、それに名前を付けることができる。したがって聴覚こそは、言語を生み出すのである。

『言語起源論』ではこのように基本的には言語は聴覚と結びつけられている。しかし聴覚について特に記述のない「彫塑」および同時期に書かれた触覚に関する草稿「触覚という感覚について」においても言語は言及されている。しかもそれは先述べたように聴覚との関連ではなく、いわば触覚的な側面と視覚的な側面ともいえるのである。このような違いがなぜ生じたのかを確認しよう。

まず初めに、触覚的な側面について論じる。それは次の箇所である。

引用 8

「盲人が案出した」名詞は真の名詞、つまり触れられる実体それ自身の名前であり、大多数の我々の言語のように——外見だけのものではない。形容詞もたしかに色もなく、多彩で絵画的でもないが、触れやすく、強固で、触れられるものであろう (FHA 4, 235)

もし盲人、すなわち視覚をもたず触覚を中心に世界を認識して人々が言語を案出したら、それは触れられる実体を表現するだろう、とヘルダーは述べる。これは触覚的な言語であり、色彩豊かではないが、強固で触れられる。これら特質が触覚のものであることはすでに確認した。このように我々が触覚によって世界を捉えるのと同じように、世界を認識する言語が存在するならば——それは省察のためのなんと素晴らしい領域だろうか——とヘルダーは賞賛するのである。

勿論、この言語は架空のものであり、本来の言語とは異なる。ヘルダーは続けて、「その言語はフランス語などではないだろう」(FHA4, 235)と述べているからである。しかし触覚的な言語への言及が戯れのものではないことは、ヘルダーの言語論の中にも同様の記述が存在することからも分かる。それは原初の言葉という次の議論である。

引用9

「ここにいる多感な生物は激しい感情を何一つうちに閉じ込めることができず、不意打ちをくわされたその瞬間に、意図することなく、全ての感情を音によって表出せずにはいられない。」(中略)「このようなため息、このような響きが言語である。従って感情に発する言語であり、自然法則そのものに他ならない」(FHA1, 698)

言語は世界を区別し、認識のしるしを付けるものだと先に指摘したが、言語の大元には別の形がある、とヘルダーはいう。それは全ての生物がもつ感情の流出としての言語である。生物が激しい感情を感じたとき、それを音として表現する。その音はため息、叫び声に基づいており、凡ての生物が共通して持つもの、自然と発せられる「自然語」であり、自然法則である。この言語は触覚的であるとヘルダーは指摘する。

引用10

デイドロは、生まれつきの盲人は苦しんでいる動物の嘆きに対して、眼が見える人間よりも敏感でないに違いない、と述べている。しかし私はある場合においては、その反対だと信じる。もちろん目の見えない人間にはこのみじめな、瘡癩している生き物の感動的な姿はすべて隠されている。しかしすべての例が教えるところでは、まさにこの隠匿によって聴覚は分散されることが一層少なく、一層注意深くなり、洞察力を深める。それでどのような嘆きの響きもそれだけ

一層切実に、矢のように鋭く伝わるのである。ここでさらに触覚を利用し、手探りをしながら、次第に手をふれる範囲をひろげてみるがよい。苦しんでいる生体の痙攣に触れ、その損傷を手で完全に感じ取るとよい。恐怖の旋律と苦痛が身体を走る。彼の神経組織は損傷を共感する。死の響きがする。これこそ自然語の持つ絆である (FHA I, 706)

感情の言語、たとえば苦しんでいる動物の呻きは、眼が見える人間よりも見えない人間の方が良くわかる、とヘルダーは言う。それは視覚を使わないことで分散されることなく、一層注意深く聞き取れるからである。しかし触覚でその動物に触れることは、その動物の死の痙攣を感じとることができ、より良い理解に繋がる。すなわち感情の言語は聴覚だけでなく触覚でも伝わる「自然語」であり、凡ての生物において共通する言語である。したがってこのような原初の言語においては「触覚は聴覚に非常に近い」(SWS I, 745)。「ゴツゴツ・ザラザラ・サラサラ」などの触覚上の音声表現は「手で触れて感じているように音を発している」(Ibid.) のである。

それでは『言語起源論』では、聴覚と並んで触覚もまた言語を司る感官とみなされているのだろうか。しかし、ヘルダーはそう主張しない。『言語起源論』において触覚に基づく感情の言葉は「本能」から生まれるものとして、「理性」に基づく人間の通常の言語とは別種のものとして論じられているからである。『言語起源論』の論題は、言語の起源についてのものではあったが、これに対するヘルダーの論点をまとめると、以下のようになる。人間は神によって言葉を話すべく作られてはいるが、言葉の完成形を与えられているわけではない。すなわち人間は神から言語を作り出す能力を得ているが、これを使って新しく言葉を開発するのであり、それは全ての生物が持ちうる感情としての叫び声とは異なる、というものである。

それでは我々が使用している言葉はどういうものなのだろうか。先に、盲人が生み出す触覚的な言語を論じた箇所でもちろん「盲人の生み出す言語は」フランス語などではないだろう」(FHA 4, 235)と続くことを指摘したが、実際使われている言語、たとえばフランス語のような発達した言葉については、視覚と共通する要素を指摘されている。彼は『旅日記』

において、理想の学校について語り、そこでは母語の次にラテン語ではなくフランス語を学ぶべきだと主張している。その理由はフランス語は「ヨーロッパのもっとも普遍的かつ不可欠な言葉」であり、私たちの思考様式からすれば「もっとも完成されている」からである (SWS 2, 58)。なぜなら「フランス語は哲学的な文法を前もって吟味するためのもっとも手軽で形のすっきりした言葉」であり、「物語、理性、推論に属する事柄のためにはもっとも秩序だっている」からである。そしてこの「理性」においては、視覚こそがもっとも発達した感官である。

引用 11

視覚が発達すればするほど、理性も共に精妙化していく。つまり理性とものを名付ける能力が精妙になっていくのである。かくして人間が視覚的現象の特徴をきわめて細部に渡って描写する段階に達した時には、なんと多くの言語や言語に類推するものがすでに出来上がってそこに蓄えられていることだろう (FHA 1, 750)

理性は視覚とともに精妙化する。したがって視覚的特徴を上手く捉えられるようになる時には言語はすでに発達していなければならぬ。なぜなら言語が十分に発達した状態においては理性的な側面が現れるからである。この理性とは、先に述べたようにしるしを分離区別し、認識する能力であり、さらにはそれを比較、推論する能力である。ヘルダーはこれを「意識性」と呼ぶ。そのため、「人間には、彼に生まれつき備わっている意識性の状態に置かれて、この意識性を初めて独力で働かせたとき、言語を発明したのである」(SWS 1, 722)と述べられる。そしてこの意識性が感情の言葉と、我々が通常使用する言葉を区別する。

以上見てきたように言語を感官と関連付ける場合、ヘルダーの議論では三つの論点がある。言語全体に関連付けられる聴覚、言語の起源において論じられる触覚的側面、発達言語として語られる視覚的な側面である。

それではなぜヘルダーの議論においては、このような揺れが生じるのだろうか。もちろん、それぞれの論において議論の前提、背景や主題の違いなどが存在し、それが理由となっっていることは否定できない。しかし彫刻は触覚、絵画は視覚と関連付けられることはこの時期の議論でほぼ変化することはないのに対し、言語に関してだけこのように様々な感官との関連が言及される点は考慮して見る必要があるだろう。

その理由として指摘できるのは、先にあげた言語の触覚的な側面と視覚的な側面、すなわち原初の言葉と本来の言葉は完全に別個のものではないことである。

引用12

我々においては、もちろん理性が感情を、そして社会の人口の言語が自然の響きをしばしば押しつけている。しかしこの場合ですらなお、轟き渡る雷鳴のような雄弁術、稲妻のように人を撃つ文芸や魔術的な身振りなどが、この自然語に模倣によって近づきはしないだろうか (FHA I, 706-7)

既に述べたようにヘルダーは『言語起源論』に於いて、自然に生じた感情の言葉と現在、使用されてる言語の違いを強調した。それは言語の起源に関し、それが完成された形で神から与えられたという説を否定するための重要な論点であった。しかしそれにも拘らず原初の言語と現在の言語は無関係ではない。原初の言葉は現在の言葉の「養分 (die Saite)」であり、時として、両者は融合する。その際、雄弁術と並んで「稲妻の様に人を打つ文芸」作品が取り上げられていることから感情に基づく原初の言語が通常の言語との断絶したものとはみなされていないことが確認できるだろう。

すなわち、この議論は第一節で指摘した触覚と視覚の関係と同様の構造を持っている。視覚と触覚が異なるものであることは、これまでのジャンル論を批判的に発展させたヘルダーの重要な主張であるにもかかわらず、視覚の根底を触覚が支え

る時、その連関は決して否定されることは無かった。それと同様に言語の視覚的側面と触覚的側面、すなわち原初の言語と発達した言語の差異は重要な論点でありながら、同時にひとつの言語として結合を否定されないものである。

さらに、この様な議論が可能になるのは、言語が関連付けられていたもうひとつの感覚、すなわち聴覚が視覚と触覚の中間に位置するものとみなされているからである。

引用13

聴覚は、外部からの刺激を知覚する領域という点で、人間の持つ感官の中間に位置する感官である。触覚は全てを自分のうちに、自分の器官の中でのみ感じる。視覚は我々を我々から遠く離れたところへと運ぶ。それに対し、聴覚は伝達可能性の程度という点で中間に属しているのである (FHA1, 746)

ヘルダーは言語起源論において六つの観点から、それぞれ聴覚が視覚と触覚の中間点にあることを指摘する。引用はその一つの論点、外界との距離において聴覚が視覚と触覚の間であることを指摘している。視覚が自己と対象を離れたところと認識するのに対して、触覚は全てを直接、自分のうちで感じる。それに対して聴覚はその中間程度の距離を保つために言語に適しているのだ、とヘルダーは主張する。引用7においても、羊という言葉が生まれた経緯を論じるとき、視覚ではあまりに印が多く見えず、触覚では全てが渾然一体となっているために印が見えない、と指摘され、聴覚は中間であるがゆえに言語に適している、という形で論が展開されていた。このように聴覚は視覚と触覚の中間に位置することで言語に適した感官とみなされているのである。

ここで重要なのは、それが二つの感官の中間であるだけではなく、隣接している感官と融合しうるとされる点である。ヘルダーは全ての感官が言葉を持つとまで主張するが、それが可能になるのは聴覚が「一方では触覚が隣り合わせになってい

て他方では視覚が隣の感官である。そこで感じ取られたものは一つになり、したがってすべては音が音となる領域に近づく。こうして見られたもの、感じられたものはまた音となって耳に聞こえるものとなる。そして中間に位置し、統合する感官が言語のための感官になったのである。我々人間は言語動物」(SWS I, 748) だからである。

このように見ると言語論において、言語が聴覚、触覚、視覚のそれぞれと関連付けられながらも矛盾を生じていない理由が理解できるだろう。それぞれがはっきりと分離しつつも同時にまた融合し合う存在と考えられているからである。逆に言えば触覚論においても言語が非常に重要な役割を果たしていることが分かる。それは単なる一側面の類似ではなく、触覚が他の感官と分離できない結合を持ち、だからこそ全ての感覚の根幹とみなされる重要な事例となっている。

しかも触覚が言語と関連付けられる聴覚を介して他の感官と連携していることは、もう一つ見逃し得ない役割を果たしている。先に述べたように聴覚は、認識の対象と主体の距離の点でも視覚と触覚の中間に位置する。遠く離れたものを認識できる視覚と、直接触ったものしか認識できない触覚、その中間に聴覚はある。触覚はこのように言語を介して聴覚、視覚と結びつくことで認識の範囲の限界を超える。その論点を示すものとして、本稿では最後にヘルダーの歴史哲学を取り上げた。

第一節で述べたように、触覚による世界の認識は、感情移入説にも比した対象と自らの引力、斥力の相互作用であった。ヘルダーは同様の方法を歴史に置いても想定している。過去は、現在とは異なる時代、直接には触れられない出来事に接する行為であるにも拘らず、他者を学び、それによって自らを形成することが可能になるのである。そして遠く離れた他者を認識し、自己の生成を可能にするのは言語である。

引用 14

魂の全本性は全てを支配し、他のあらゆる性情や精神力を自分に似せて型どり、ごくつまらない行為をさえ自分の色合

いで染める。これを我が身で感じるためには、字面だけを見て答えてはならない。時代の中に、風土のなかに、歴史全体のなかに、一切のなかに感情移入をしなければならぬ——そうしてのみ、君は言葉を理解できるようになる。だがまた、そうしてのみ、ここであれ全体であれすべては自分だという思い上がりも消えるだろう (CHA 4.33)

歴史において他者を認識するためには、言葉を表面的になぞるだけではなく、歴史の中に入り込まなければならぬ。その時に重要なのは、他者を自分に似せることではない。触覚が引力と斥力で動いていると言われるように、他者の中に入り、全てを内側から感じつつも、それが自分だという思い上がりを捨てることである。その時初めて私たちは別の時代を理解しつつも、同時に自分が何者であるのかも分かる。これはヘルダーの触覚論を歴史に当てはめたものとも言えるが、本来は触れられないはずの歴史対象にたいしてこのような認識を可能にするのが言語である。この歴史哲学は、さらに翻って触覚の議論にも反映されないだろうか。触覚は世界の接し方の根幹であり、触覚によって現実を認識できると言われていたが、その時想定されている触覚は触れられる今、ここに限定されないだろう。彫刻を見るだけで触るように感じるのと同様に、言語は歴史的に離れた他者を経験することを可能にする。その時、触覚の世界は「小さい」ものではなく、聴覚、視覚と融合しつつ、より広い射程で世界を捕らえる能力として想定されているのではないだろうか。

結語

本稿ではヘルダーの触覚論において言語の果たす役割を考察した。触覚は聴覚、視覚の根幹となりそれらと区別されつつも、他の感官との分離し得ない結合が強調されていた。それを可能にするのが、言語という論点である。言語は聴覚と主に関連付けられながら、原初の言語と発達した言語という形で、その触覚的側面と視覚的側面を読み取ることができた。その

議論の中では、聴覚という感官は視覚、触覚の中間的立場をとりつつ、その両者をつなぐ役割を持っていた。さらに言語はこのように触覚と他の感官と関連付けることで、触覚が持つ、限定を緩和する可能性を示唆している。それがヘルダーの歴史哲学である。ここでは本来触れるはずのない歴史の対象に言語を通して感情移入することによって、触覚経験と類似の経験が可能になることが指摘されていた。その時ヘルダーの彫刻論、文学論、そして歴史哲学が触覚および言語の議論を中心として一体のものとして見えてくる可能性があるだろう。

本稿は平成二十九年文部科学省科学研究補助金（若手B）による研究成果の一部である。

凡例

ヘルダーからの引用は『フランクフルト版作品集』(Johann Gottfried Herder: Werke. Hg. Von Martin Bollacher u.a. Deutscher Kasseler Verlag, Frankfurt a.M. 1985-2000. (FHA))、および『スプハーン版』(J.G. Herder: Sämtliche Werke. 33. Bde. Hg. von Bernhard Suphan, Berlin 1877-1913. (SWS))により、巻数、頁数の順に示す。

邦訳は以下を参照した

『言語起源論』大阪大学近代文学研究会訳、法政大学出版局、一九七二年。

『世界の名著 ヘルダー ゲーテ』小栗浩・七字慶紀訳、中央公論社、一九七九年。

『思想』(1105)、岩波書店、二〇一六年五月。